

巻頭言

名古屋学芸大学健康・栄養研究所
所長 下方 浩史

コロナ禍が下火になって、学会や授業もほとんどが対面で行われるようになり日常生活が戻ってきたと思っていたら、能登半島地震、羽田空港での航空機衝突事故と正月元日から大きなニュースが続けざまに起きて、2024年はたいへんな幕開けになりました。さて、そのような中、皆様のご協力で、今年も健康・栄養研究所年報の第15号を発刊することができました。

本誌は名古屋学芸大学健康・栄養研究所の研究や実践活動の成果発表の場であるとともに、その成果を広く社会に知っていただくために発刊を続けています。2009年から、本誌は医学中央雑誌データベースに定期刊行物として収録され、医中誌 Web でも検索できるようになっています。第15号では原著4編、総説1編、報告2編と計7編の論文と、さらに書評も加わり、充実した内容になりました。

原著では、「COVID-19対策下における給食の時間を楽しむ児童とエゴ・レジリエンス—愛知県 A 小学校の事例—」、「健康支援型配食サービスにおける「カムカムチェック弁当」の栄養スクリーニングとしての有用性」、「和食スコアを構成する食品群と低骨密度率および60歳以上の骨密度との関連—10年間の国際比較研究」、「女子大学生の瘦身願望に関する社会的・心理的特性の検討」と、栄養疫学や栄養教育について貴重な研究成果が報告されています。総説では、「人工甘味料と健康」と、WHOの勧告などで注目された人工甘味料についての最近の知見がまとめられています。報告では、「2023年度 食の安全・安心タウンミーティング」、「HACCPの考え方に基づいた衛生管理の実践」などの研究所関連のミーティングや研修の内容がまとめられています。また書評では、前研究所長、足立己幸先生の著書、「共食と孤食 50年の食生態学研究から未来へ」の内容が紹介されています。

今年も、「栄養」と「食」に関する論文や報告が多く集まりました。食は人生の楽しみでもあり同時に、健康づくりの基本でもあります。研究所からの研究成果や実践活動が、私たちの健康の維持増進に役立っていくことを願っています。